

ルフェーヴルの『パスカル研究』  
について

——Henri Lefebvre, Pascal, tome I, Paris 1949  
tome II, Paris 1954

岡 祐 記

戦後におけるパスカル研究の一動向を伝えるものとして、ルフェーヴルの「パスカル研究」のあることは、すでに指摘のあ

ったところである。<sup>(註)</sup>最近その下巻が刊行され、ようやくその社會史的バスケル研究の全貌を窺うことができるようになった。以下、その研究の方法と成果とを吟味し、思想史というもののあり方についてもいくらか考えてみたいと思う。

(註) 野田又夫「史的唯物論からみた哲學史」——ルフェーヴル著「デカルト」「バスケル」に因んで——一九五三年  
(河出新書「自由思想の歴史」所収)

まず内容を項目的にあげてみると、一卷は(一)バスケルの時代の狀勢と、(二)バスケル個人の經歷と、(三)その科學者としての業績とを論じた三部よりなり、二巻の方は(一)序論、すなわちこの研究に寄せられた諸批判とそれに對する反批判と、(二)プロヴァンシャル、及び(三)パンセの分析、そして(四)結びと評價、といったバスケル哲學の正面きつての論評となっている。ルフェーヴルはマルキシズムについて、それを一定のドグマや公式として固定せずに、その方法と世界觀とを生きたものとして、全體的にとらえようとしているが、近代思想の巨人たるバスケルについても、彼とともにその時代に生きることによつて、嘗て彼の問題であつたと同時に、現在ルフェーヴルの(したがってわれわれの)問題でもあるものの解決を求めようとしている。その「思想の社會史」研究の意義も、この邊にあるようだ。

今までの哲學史には、あまりにも客觀的規準というべきものが缺けていたとルフェーヴルはいう。<sup>(註)</sup>「いっそう完全に客觀的になると考えれば、その仕事がますます主觀的になることには

氣づかない」のである。そこで、より客觀的な歴史の一面として哲學史を考え直すには、それを文化や思想、認識の一般史の一章として、社會史の基礎の上に戻されねばならない。同時にそのことは、過去の哲學を評價し批判するための條件をもわれわれに與えてくれる。

(註) cf. Henri Lefebvre, Descartes, Paris 1947, Introduction

ルフェーヴルによれば、哲學は神學的宇宙創成説と辯證法的唯物論との中間に位置するものであつて、神話や宇宙創成説がそのよつて立つ社會構造として原始共同體と村落共同體(奴隸制、封建制、農奴制)を持つのに對して、哲學はブルジョアジのイデオロギーとしてその社會の矛盾を反映している。すなわち、ブルジョアジの實踐的唯物論(物質主義、經濟的關心、技術の重視)と理論的觀念論(理想主義、抽象的思辨)との矛盾が、哲學において科學的認識と形而上學的思辨との矛盾として現れるのである。したがつて、「あらゆる哲學は矛盾であり、」「矛盾が解消さるべきである限り、哲學もまた解消さるべきものとなる。」彼は、哲學を思想の辯證法的發展の一段階と解し、究極的な世界觀である辯證法的唯物論に止揚されるべきものと考へている。かくて思想の發展段階の理論によつて、思想のしたがつて哲學の價值批判の基準が與えられるし、また同時に、その理論が社會そのものの發展段階の理論をもとにして考えられる限り、批判の基準は社會的客觀的なのである。辯證法的唯物論は、思想を歴史の動きのうちに戻すことによつて「諸科學

の「総合」を成就し、思想の社會的批判に到達し、最後に合理的で整合的なヒューマニズムを仕上げる。というのは、辯證法的唯物論こそこれまでの哲學が思辨によって解決できなかった矛盾を、社會的實踐によって解こうとする全人類の普遍的な世界觀、唯一真正な科學的哲學であるからである。以上のような「方法的假説」を携えてパスカルに臨む時、どんな結果が得られるのであろうか。

ルフェーヴルの分析は、まず、當時の社會體制、その十七世紀の經過における動靜を見、さらにジャンセニスムの意義をも明らかにしようとする。

社會經濟的には「すでに早く十六世紀の頃から、ブルジョアジー支配の特徵的社會諸關係——交易のための生産、貨幣經濟、自由競争、資本蓄積などといったもの——が封建的諸關係を打破り始めていた」(一卷二頁)が、政治的に未熟な彼らブルジョアジーは、自己の目的をはっきりと自覺し表明するまでに至らず、たゞ宗教戦争という——つまり孤立した個人的意識の穿さくという——ものに墮落していくのである。ルフェーヴルによれば、十七世紀とは「階段と階段とをつなぐ踊り場のような、つまりは一時的な均衡と停滞の時期を意味している」。(一卷三頁)君主國家の成立を可能ならしめたのも、このようなブルジョアジーと封建體制との間の軋轢の一次的弛緩であった。當時の絶対王制とは、貴族と市民との權力の張合っている場の統一であったのである。傳統的な「軍人貴族」が宮廷人化して行くのと平行して、上層市民は買官によって下級貴族

の地位を得、當時の官僚組織の中核となる。そこで農民は、封建的貴族の支配の下にあった時よりむしろ強い壓迫をうける。つまり新たな上層市民が「土地の買い占め」(一卷二頁)によって農村共同體を解體させる方向に働くからである。當時、しばしば起った農民の暴動・叛亂が端的にそれを物語っている。

ところで、上層市民すなわち主として法服貴族の中にも、絶対王制に反抗する一群があった。それら不平黨の據るところは高等法院(Parlement)であり、十七世紀中頃には、政治革命への動きを見せる。それが有名な「フロンドの亂」であった。ルフェーヴルはこの亂をもって、挫折した市民革命としている。「フロンド黨」の名をもつて呼ばれる群衆は、「民衆の一部を道連れにした、不平な都市ブルジョアジーから出ていた」(一卷二四頁)と見る。そしてこの亂が、このような高等法院派の市民によってひきおこされたにもかゝらず、たちまちに不平貴族の陰謀に過ぎぬものに落ちたのも、農民の協力を得ることができなかったからで、挫折の結果であったと述べる。フロンドの亂後、反宮廷運動や、政治的不安、深刻な不満はもはや正面きって世間に現れることができなくなった。「高い官職などについて、國家機構の中に組入れられたりすることを望まず、望んだところでできもしなかった上層中産階級(すなわちブルジョアジーと法服貴族)は、彼らの反感や幻滅を表現するために、過ぎ去った昔の、しかしなお未だ彼らが完全には棄て、はならない形態を再びとるようになった」(一卷二五頁)そして「このような不滿の觀念的形態が、すなわちジャンセニスムで

あった」(一卷二六頁)のである。

ルフェーヴルは、ジャンセニスムという神學的理論を「一つの政治的抵抗の置換された表現」(二卷三四頁)と見なし、さらに教會のみならず國家における一つの黨派でもあったとする。

ジャンセニスムの理論がその歴史的条件として持っていたものは「族長制的な農村共同体(Communauté)であり、その風土に起源を持つ信仰であり、主張であり、神話であった。」(一卷四四頁)このような神話の復活が、その母胎たる共同体の崩壊と時期を同じくしていることにルフェーヴルは注目する。彼に言わせるならば、この現象は、今まで堅固に組織されていた時代の共同体では「はつきりした形象も、概念も、持ち得ずに生き續けてきた昔ながらの諸價値」が、母胎の崩壊という反動の前に「より明確な概念として自己を形象化し、定式化してきた」(一卷四四頁)ことにある。この立場から見れば、ジャンセニスムの思想とは「資本主義の出發に、個人主義の誕生に、ブルジョアジーの誕生にともなうて現れる」ことにならう。

「悪と恩寵の問題、救靈豫定の問題は、一つの現實の問題の——すなわち個人の問題の——觀念的形態であった。つまり近代的な意味における「個人」なるものが、當時の社會的現實の中において、既に事實の問題として現れていた「個性」(individualité)という性質をそなえて登場しつゝあったのである。けれどもそれは原則として、共同体の崩壊という、この「個人」が同時にその原因でもあればその結果でもあった過程を通してであった。」(一卷四五頁)

かくてパスカルへの接近の視點は定まる。高級官吏の家柄に、金利生活者たるブルジョアの家柄に生れたパスカルはまさに「その屬していた社會層の立場を代辯する」ものであったし、また、迷えるブルジョアジーの矛盾と苦惱の反映でもあった。

以上、上巻がもっぱらパスカルという思想家の外側からの分析とすれば、次に述べる下巻は、その思想のいわゆる内からの分析である。この點ルフェーヴルの社會史的方法論は、やゝ統一を缺いている。しかし彼自身このことは認めているのであって、思想というものが決して社會經濟的視點から汲みつくされるものではなく、そこには限界があることを述べている。

「個人の經驗、個人の良心は諸階層(couches)の累積としてきめられることはできない」(二卷「序論」)社會的歴史的諸關係より個性の中心へ、そして次にはその逆を。このように彼は、主觀的方法と客觀的方法との兩者の交互的使用を主張するのである。この方法論的論議に含まれている意義の重要性については、あらためて言うまでもあるまい。この點についての検討は最後にまわし、以下二卷の内容に入りたい。

今まで宗教的イデオロギーの諸關係の中に埋れていた世俗的生は、十七世紀に入るとブルジョアジーの上昇にともなうて、神學的、形而上學的規範から自由な新しい價値を創造し始める。そこで世俗的生が宗教外に現れる結果、人々はあらためて宗教と生との關係をば問うことになる。プロヴァンシャル論争の生れる社會的背景とは、このようなものだったのである。ルフェーヴルの「プロヴァンシャル」に對する評價は、「パンセ

に比してやゝ低い。すなわち、それは「バンセ」の序論として考えられており、それ独自の價値を持つものとして研究されておらないのである。パスカルは、われわれの善き行爲をある場合には神に、ある場合にはわれわれに屬させる矛盾を調和させようと努力するが、その時、論理ではなくて説得の術を使用する。ルフエーヴルにとってこれは、合理主義の退歩を意味するように思えた。それは方法ではなくて、技巧である。「それは理論と形而上學に文學を導入すること」(二卷六八頁)であった。

總じて、ルフエーヴルがパスカルの業績に加える評價は著しく低いのである。そしてそれは必ずしもパスカルに限らず、古典主義の文學者、思想家全體に對する評價とつながっている。ルフエーヴルは十七世紀フランスを「フロンドの亂」を境に前後二期に分ち、前半を活力に満ちた上昇期と見、後半すなわちいわゆる古典主義の時代は、一般文藝史家の讚えるような價値を持つと考へない。パスカルについても、その科學的業績の見べきものは、やはり「フロンド」以前の時期にできているともいふ。

パスカルの自然科學的諸研究を通じて見られる思想の特色は、これらの研究によって達せられた、無限に豊かな内容をふくむ客觀的實在としての自然の概念、及びそれに即しての科學的認識の無限な進歩の觀念が、最後にはすてられるということである。

パスカルの思想の新しさとは何か。それは有限を無限の下で、彼獨特の方法で打壞すことにある。われらの肉體は無量大

に向つては一點にすぎぬが、無限小に向つては一つの世界である。われらは「無限に比すれば一つの無、無に比すれば一つの全體、無と全體との中間者」なのであるが、パスカルの魂はここに安住しようとしなない。無限の前における有限の虚無性のみが強調される。その無限概念は本來は自然學的、數學的内容を持った量的(quantitatif)概念であるが、一度パスカルの手にかゝると質的(qualitatif)評價が加えられてしまふ。すなわち、その科學的業績の中でかち得た無限をば、「神學的な方法で解釋」(二卷一一九頁)しようとする。パスカルの思想には、二つの世界概念——中世的、宗教的、形而上學的なそれと、自然學的、近代的なそれ——が對立している。

さらにこの無限の問題が秩序の觀念に結びつくとき、その神學的性格はいよいよ明瞭となる。肉體と地上の生は精神の前では無となり、精神、理性も神の眞理の前では虚無となる。かくて始め、無限な、統一した實體としておかれた自然は、二つの無限の間に引裂かれ、次いで異なった秩序におかれることになる。彼の論理では、より一層高い秩序の前では下位の各秩序は無である。結局パスカルは、科學者としてデカルトの立場をある意味でさらに徹底しながら、形而上學的にはかの「三つの秩序」の説が示すように、中世的な hiérarchie をあらわしているのである。

このような混同、矛盾、そして轉換は、パスカルの中で悲劇的に對立している信仰と認識との解決不能の争いを、そのまま、投影している。パスカルは、キリスト教を完全に再検討しよう

としていた。すなわち「パスカルのキリスト教」(二卷八七頁)であった。新しい事實——理性、科學、科學上の發見——を含めて統一あるキリスト教的世界概念を再構成しようとする。しかしそれは「パンセ」の斷片に見るように「一つのラプソディに終っている。」(二卷八七頁)

われわれは常に休息——すなわち最高善——を求めようとしながら、それに到達することができない。パスカルの描く人間とは、そのような、自己の眞の状態を考えようともせず、氣ばらしの中にあつてたゞ悲惨な生活を送っている人々の姿である。このような人間觀に對して當然、ルフェーヴルは立向って行く。「パスカルは何故、われわれ人間の行動的なことを認めようとしぬのか。行動こそ、休息と氣ばらしの矛盾を解決してくれるのだ」(二卷一三七頁)と。ルフェーヴルによれば、實踐的行動とは、絶對の休息も完全な慰めも含んではいない。眞の辯證法的思考にてらしてみれば、パスカルの自我(Ego)の分析は似非辯證法であつた。すなわち、自己の良心(Conscience)の中に感じとられる不幸を包み隠そうとして、辯證法という手段がとられたのである。不幸の念は、良心がその反映する社會の發展段階に立後れているところに生れるのだ、と彼は語る。

パスカルには全く調停というべきものが無く、一つの言葉の上での「神と世界との間の神學的調停者——キリスト——」があるだけである。「この矛盾は永遠の流産であり希望ではなかつた」(二卷一四二頁)という言は、パスカルのディレンマを適確にあらわしている。

パスカルの神、それは「隠れた神」であつた。完全なる自己犠牲と自己憎惡の中にあつて、パスカルは唯一人、人間であり神であるキリスト(Mort-privé)に向うのである。パスカルの獨創性、それは個人を不安そのものと見なしていることにあり、ルフェーヴルは述べている。そのペシニズムは、まさにその屬す階級の思想的限界を反映しているものであつて、パンセが未完成に終つたことの原因もそこにあつたのである。信仰という行爲は、理性によつて維持されたものではなく、非合理的行爲として考えられている。パスカルの賭の論理もこゝにその意味を見出すのである。

過去の哲學者の思想に内在する矛盾を、社會の場に客觀化してとらえるという方法の有効なことは、よく認められた。特にパスカルのおかれた歴史的社會的狀況の分析は優れており、多くの示唆に富んでいる。だがパスカルの思想の評價という點になると、異論は避けがたい。ルフェーヴルは十七世紀を前半と後半とにわけて、文學も哲學も前半の方が價值が高いと見ている。この觀點は、マルクスの十七世紀經濟觀——コルベールティスムの評價——に據っているようだ。「分析の客觀的尺度は生産力の發展であり、國家統一の形成と確立である」(二卷三二頁)と語っている。コルベールティスムは、そのような市場の形成と資本の蓄積に貢獻したと考えられている。だがこのような社會經濟的評價がそのまゝ、思想の領域にまで擴大できるであらうか。例えばジャンセニスムの進歩性についても、その絶對王制へのプロテストを如何に考えるべきか。それとも絶對

王制自體の性格が十七世紀前半と後半とで、明確に區別される  
とも言うのだろうか。一體「思想の社會史」と言う時、社會  
とは何を、どこまで、對象とするのだろうか。

ルフェーヴルは自己の方法を、「内からの主觀的方法 (subjective  
ethisme)」と「外からの客觀的方法 (objectivisme)」の辯證  
法的統一であると述べて、individualisme を生み出した歴史  
的、社會的條件にまで迫ろうとしている。個性と社會——だが  
この問題はそれほど簡明ではない。例えばジャンセニスムを生  
み出した母胎はある程度分析し得ても、それをもって直ちに、  
パスカルの思想の中味を説明することは可能であろうか。パス  
カルのジャンセニスム、アルノーのジャンセニスムはあり得て  
も、思想の流れとしてのジャンセニスムは、果して實體として  
客觀的に存在するのだろうか。

(註) cf. Blaise Pascal, *l'homme et l'oeuvre*, Paris, 1956  
① 論文集の中、M. l'abbé Cogne の *Le jugement de  
Port-Royal sur Pascal* はこの問題について色々の示唆を  
含んでいる。従来「パスカル」から見た「ポール・ロワイ  
ヤル」が多かったのに反し、コニエは「ポール・ロワイヤ  
ル」の見たパスカル觀を展開して「ポール・ロワイヤル」  
と「パスカル」の思想的關係を分析しようとする。

パスカルがその信仰を他力の信仰に徹底しておこなった時、  
それは單にストア主義の個人的道德を越えたにとどまらず、そ  
こでは同時に社會的正義が批判されているのである。彼は自然  
法的正義を現實に照し合せて批判し、従って政治をレアリスト

の眼で見ているのである。パスカルのキリスト教とはそのよう  
なものだったのである。しかしルフェーヴルの眼には、このこ  
とが映らないのである。すなわち、宗教(神學)は、封建社會  
と運命をともしると考える彼には、パスカルの宗教の近代的  
意義が見えないのである。

「思想の社會史」が思想史の客觀性を保證するとともに、「思  
想の社會的批判」をも與えるということは、「思想の社會史」が  
單なる科學でなく、一つの哲學、世界觀であることを示して  
いる。辯證法的唯物論が、従來の市民哲學を葬るとともによく  
生かすという主張は、このことを明瞭に物語るものだ。ルフェ  
ーヴルにおいては、過去の市民の哲學が全て、一つの視野の中  
にとらえられ得ると考えられており、その視野とは「思想の歩  
み」——歴史——をつむ「哲學」——世界觀——であったよ  
うだ。歴史と哲學とは、一つは「過去」へ他は「未來」へ向う  
二つの視野に譬えられる。しかしその際、歴史が自己の誤謬を  
完全に解消してゆく過程であるとするで「現在」において明か  
に見られている視點が、われわれにもとれるだろうか。「進歩  
の觀念」を一方でとりながら、他方で、人間がどこまでも誤ま  
りうるものと考えていたパスカルの矛盾を、われわれは意義深  
く考えるのである。パスカルをこのように考え、追求しようと  
するならば二つの逆方向の視野がとり得なければなるまい。す  
なわち、辯證法的に統一するという仕方ではなく、その二元性を  
まさしく徹底するという意味においてである。